

「車椅子から見たボランティア」

本日は SON 東京の 25 周年、おめでとうございます。

さて、今日は僕の実体験から、お話をさせていただきます。

3.11 東北大地震から二ヶ月ほどたった頃、「知的障害のある人たちの避難」という新聞記事が眼に飛び込んできました。知的障害者の施設が被災し、避難したのですが、避難所では一般の被災者の方々に迷惑がかかるということで、障害者の皆さんは避難所を点々とし疲れきってしまっているというのです。

この記事は衝撃的でした。何か支援できることはないかと、僕はすぐに車に靴下を出来るだけたくさん積んで福島県のいくつかの非難所を訪問しました。それ以来、福島だけでなく、宮城、岩手など 20 か所の施設をたびたび訪問することになります。

1 年ほどたったある日、施設からの帰り道に僕は交通事故を起こし、頸椎を損傷、胸から下の感覚を失い、その後 1 年半入院生活を送りました。

病院で事故後初めて車椅子に乗せてもらい、ガラス越しに青い空に浮かぶ白い雲を見た時の喜びは忘れられません。窓の隅に小さな蜘蛛が巣を作っています。こんな小さな蜘蛛も一生懸命生きていることに感動しました。

青い空、白い雲、小さな蜘蛛、こんななんでもない光景が僕に「大きな力」を与えてくれました。当たり前の日常のありがたさに、失って初めて気がついたのです。

入院中のある時、僕は看護師さんやヘルパーさんに 1 日に何回「ありがとう」と言うのか数えてみました。65 回でした。今の僕はそれだけ人の助けを必要としているということを知りました。身体が自由に動かない僕でも手助けや応援があればいろいろな事が出来、喜びも沢山感じることができます。

受傷前は、アスリートやファミリー、ボランティアの皆さんと楽しくスキーをしていましたし、スキーのトレーナーとしてコーチクリニックのために全国のスキー場をまわっていました。

障害者になったことで、僕はボランティアと、アスリートの両方の立場を経験することになりました。

受傷前、僕は僕なりにアスリートの事を理解しているつもりでしたが、日常生活が不自由になって初めて分かったことがたくさんありました。

一つ目は、アスリートとしての喜びを障害者になったことで実感したことです。

入院中のリハビリの一つにボッチャがありました。僕は手が動かせないので、ガイドスロープにボールを載せてもらい、口頭で「もう少し右に」とかを伝えます。狙い通り相手のボールに当たった時はすごく嬉しかったし、楽しかった。

僕がボウリングプログラムのコーチの手伝いをしていた時に、ガイドスロープを使用していたアスリートが本当に嬉しそうに笑顔でボウリングをしているのを見て、きっと楽しいんだ

ろうなあとは思っていましたが、実際に自分がアスリートになって初めて、それはとても楽しく、喜びを感じることはライフスタイルそのものを豊かにし、頑張ろうという力を与えることだとわかりました。

二つ目は「応援には大きな力がある」ということです。

入院中にたくさん的人がお見舞いに来て応援してくれましたが、それが僕にどれだけ「大きな力」を与えてくれたことか。もしそれがなかったら、1年半のつらいリハビリに耐えきれず、車椅子に乗ることもできずに寝たきりになっていたかもしれません。

ボランティアの皆さん、皆さんの活動は皆さんのが思っている以上にファミリーやアスリートに大きな力を与えているのです。

そしてその応援とは、お互いを認め合い思いやること、やさしい気持ちを持つことであると実感しました。僕もコーチだった時にはそれは当たり前の事だと思っていたが、今思うと一方通行的なところが無かったかどうか考えさせられます。

ボランティアの応援とは、「アスリートとしての喜び」を知る手助けをすることであり、そしてそれが「大きな力」を持っていることを皆さんに伝えたいと思います。

最後にアスリートが安全に、新しいことに挑戦し、怖さを乗り越える勇気を持ち、あきらめず続けていけるように、ボランティアの皆さんのが、応援という「大きな力」を与え続けてほしいと心から願っています。